『地域政策研究』（高崎経済大学地域政策学会）　第２巻　第１・２合併号　1999年10月　134頁～136頁

書評

千葉貢著「田舎者の文学―『近代』の悲しみを背負って―」

市川浩昭

日本文学における近代とは、あるいは近代日本文学について考える時、あらためて文学における近代というものを意識しなければならないのではないか、と思うようになって久しい。近代のもたらした様々な意識や制度は日本人の生活や意識に大きな影を落し、それまでの伝統的、歴史的な文化のあり方、あるいは日本人性そのものに対し、大きな変化をもたらしたといっても過言ではなかろう。明治維新以降の一世紀余りの時間は、その意味で日本の歴史と人間にかつてないほどの変化を与えたと言えるだろう。

二十一世紀を目前にした今こそ、その変化の百年であり、日本の本格的な近代化の世紀であった二十世紀の意義を探ることは、文学における近代を考えるばかりではなく、日本と日本人を考える上で重要な作業であろう。

千葉貢氏がこのたび上梓された「田舎者の文学―『近代』の悲しみを背負って―」は、文学作品に顕れた日本の近代の意味と意義を問い質す、そうした成果を示した論集だと言える。

本書のその表題を見た時、一体これはどのような内容なのか、実のところまったく想像できなかった。ところが、本書を読み進めていくうちに、近代日本文学が内包する近代というものの生みだす矛盾と、文学作品に顕れた社会や制度の欠陥を指摘する、きわめて批評性の強い言説であることに気付かされた。それは文学テキストや文学研究の制度に自閉することのない強い意志すら感じられる。時に、文明批評であり社会制度批判であるばかりではなく、近代から現代の日本人論にまで通底するような、著者の厳しいまでの現実認識を物語るものとなっている。その意識はまた著者自身が文学作品に向きあう時の、著者その人の主題として示されているように思われてならない。本書を読みそして感じる刺激的な著者の主題に驚ろかされ、さらに文学研究の有する可能性の拡がりをあらためて意識させられる。だが、その一方で、この主題の強さは両刃の剣なのかもしれない、という漠然とした思いを抱かせるのも事実である。

さて、本書はその基層的な主題ともいうべき「強いられた『近代化』

一

―喪失の時代―」を序論とし、十本の作家・作品論がならぶ。二葉亭四迷「浮雲」論が三本、岡倉天心「アジアは一つだ」、石川啄木「林中書」、田山花袋の評伝と「田舎教師」論、島崎藤村「海へ」、萩原朔太郎「日本への回帰」、安岡章太郎「海辺の光景」と、その対象は近代日本文学の草創期から第二次世界大戦後の第三の新人までの小説家、詩人、芸術評論家など多岐にわたる。これは一様ではない著者の関心の高さを示していよう。

本書に通底する著者の問題意識は、序論に示されているように一貫して明治以降の西洋近代導入による日本の近代化の持つ矛盾とその問題点の指摘にある。著者も言うように、有名な夏目漱石の「外発的」な近代化の問題とその弊害を現在に至る問題として受けとめ、その問題点を明示批判した上で、そこからの脱出と新たな日本の進むべき方向性を示唆する。その意味では単なる近代もしくは近代化や現実に対する批判ではなく、著者の解決策とそのあり方が示され、著者の持つリアリスティックな現実認識の姿勢が示されたものとなっている。

だが、一方でその問題認識の内には、いくつかの見過ごされた重大な要素もあるのではないか。それは著者の言説が近代の産みだした制度上の問題をとりあげ、それに対する指摘を試みながら、肝心な近代とその時代の意義を自明のものとして、あらためてとり上げていない点だと思われる。現実の、あるいは歴史的な経験によって記憶認知された問題に対する事象に目をむけ、その弊害を批評するあまり、西洋近代の母胎ともいうべき最も本質的な人間観の問題などはある意味では触れていない。漱石は確かに「外発的」な近代化を苦渋をもって容認したが、一方で西洋人の近代が「内発的」なものであり、その人間観によって裏打ちされ、育くまれたことを理解していたはずである。はたして西洋近代の根本にある人間観を、日本もまた確立したのであろうか。著者は性急な調子で「新近代化」を唱えるが、その前にまず、近代的人間観をめぐる日本と西洋との対比や、近代という時代の本質的な成熟の度合を、日本や西洋のそれぞれの場合を考え、そして比較するような作業を通じて明らかにする必要があるのではないか。そして日本の近代を相対化し、課題を明らかにする作業もまた必要だと思われる。

二

ところで、先に著者の刺激的な主題を両刃の剣ではないかと記したが、少々気になる点がある。それは文学作品をとりあげ、それについて論じる場合、文学作品には一つ一つ完結した世界があるのだ、ということを忘れてはならないとあらためて感じたからである。つまり、作品自体が有する自律的な世界の解明もまた、文学研究という作業には重要な要素であるということである。なぜならば、文学作品の持つ自律的な世界の解明や解析というものを通して、人間存在を語ろうとするのが人文科学における学としての文学研究の意義だとすれば、作品自身が有する可能性の充分な検討がなされなければ、作品自身の内包された価値を見失うことにもなりかねない。その意味で、個々の作家・作品論のなかでそれぞれの価値を考慮するために、研究史や現在の研究上の問題点などを明確化させ、その上で自らの問題点を明瞭化

するべき作業も必要ではないかと思われる。

先に記したように新世紀を目前にした今こそ、日本にとっての変革を余儀なくし、あるいは本格的な近代への船出ともなった二十世紀の意義をあらためて問い直す時期であろう。本書に示された著者である千葉氏のスリリングな主題と文学作品を介した論旨の展開は、近代の意味を問い直す一つの物差しを提出している。あるいはその役割を担っていると言えよう。また、文化論的な視座からの文学作品解析のあり方も、検討すべき点はありながらも、新しい作品作家研究の可能性を示していると言えるだろう。今後の千葉氏の活動に期待したい。

（平成十年三月二十五日　高文堂出版社刊
A5判　二六七頁　三、三三三円）

（いちかわ　ひろあき・群馬県立女子大学非常勤講師）

三